

# 株式会社GF 本社棟

GF Corporation Head Office

No. 03-090-2025作成

新築  
事務所

発注者	株式会社GF	カテゴリー	A. 環境配慮デザイン B. 省エネ・省CO2技術 C. 各種制度活用 D. 評価技術/FB			
設計・監理	株式会社大林組 OBAYASHI CORPORATION	E. リニューアル F. 長寿命化 G. 建物基本性能確保 H. 生産・施工との連携				
施工	株式会社大林組	I. 周辺・地域への配慮 J. 生物多様性 K. その他				

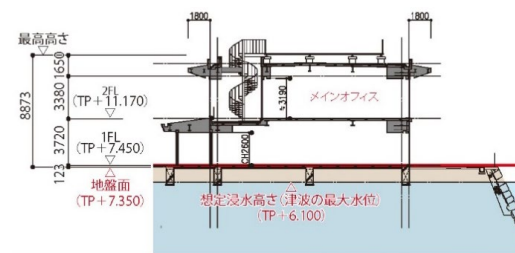
## 再生可能エネルギーの普及を通じて地域社会との共創を目指すオフィス

### 社員と地域住民の安全を守る拠点となるオフィス

太陽光・風力による自然エネルギー発電事業とエンジニアリング事業を展開し持続可能な社会の実現を目指す株式会社GFは、津波や河川の氾濫などの自然災害から社員および地域住民の生命を守るため、本社屋をより安全な場所へ移転した。敷地は津波の想定最大水位より高い位置まで盛土し、地域の防災拠点としての機能を持たせる一方で、建物は眺望を最大限確保できる敷地北面の川岸に配置し、東西に伸びる直線的な形状とした。周辺住宅に配慮し西側の屋根の高さを抑え、東側の河川・海に向かって1m高くした片流れ屋根は、周辺環境との調和と開放的な執務空間の実現を両立した。外構は住宅側に緑地を計画し、敷地境界には地域で採れた石を使った石積擁壁とし、周辺の寺社や堤防の石積みの景観と調和させた。敷地境界は塀やフェンスのないオープンな外構とすることで、災害時には地域住民の避難も受け入れることのできる地域拠点としての役割を担うオフィスを目指している。2026年春には本社屋の屋根や駐車場に太陽光発電設備を導入し、再生可能エネルギー100%による事業運営（RE100）の達成を目指し、2027年には余剰電力を地域に供給し地域の脱炭素化を推進する計画である。



大海原へと進む一隻の船をモチーフとした外観



浸水高さとの関係

### 海に向かって大きく開く大階段アトリウム

東側の海に向かって屋根を広げた開放的な吹抜空間は、2階メインオフィスへの主動線である大階段としている。河川・海をガラス越しに望む大階段は、浮遊感のあるインナーバルコニーに囲まれ、朝礼や講演等、日常的に使われるアトリウム空間となっている。大階段下の空間を利用してエントランスのカフェ厨房、災害時のストックヤードとしての機能をもたせ、大階段はワークショップなど地域住民とのイベントスペースとしても活用されている。



南東面 外観



大階段アトリウム

### 地域住民と自然な距離感を育むエントランスと外部空間

エントランスに併設したカフェでは地元食材を活用した日替わりランチなどを提供しており、社員の利用だけでなく毎週水曜日は地域住民にも開放し、社員と地域住民の憩いと交流のスペースとなっている。敷地西側隣地と建物の間に緩衝緑地として旧本社屋からの樹木を移植し、緑地帯の延長線上にある会議室からの眺めは寺社を借景として取り入れ、企業とともに成長した樹木とともに近隣の景観と調和している。



一般開放日に賑わうカフェ



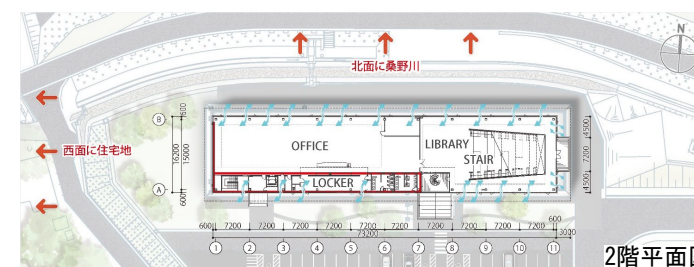
南面 外観

### 川沿いの豊かな環境を取り込むワークスペース

2階のメインオフィスは川沿いの豊かな外部環境を最大限取り込むワークスペースとして計画した。北側の桑野川、東側の海に開けた壁面は眺望を最大限に生かしたカーテンウォールとする一方、南・西側は壁面の構成とし、西側は住宅からの視線や西日を遮蔽し、南側は縦動線を含めた設備機能を集約する壁とすることでオフィスの空調負荷の低減を図っている。日射を遮る庇の内部にスリットを設け、軒天部分を給排気利用することで、サッシの存在感を極力消し、眼前に広がる景色と作業空間を遮るものが何もない、開放的なオフィス空間を目指した。



2階メインオフィスから北側の桑野川を望む



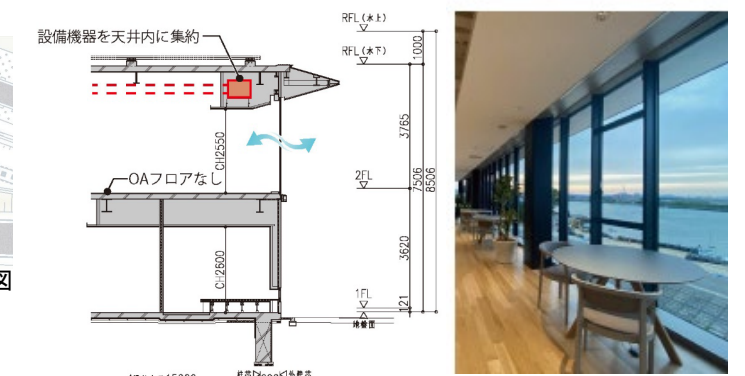
2階平面図

西側の住宅に配慮し、階高を抑える一方で、メインオフィスはペリメーター部を除く内部空間を直天井とすることで最小の階高で最大限の天井高を確保する計画とした。オフィスのどこにいても外部環境が取り込めるよう、換気窓を計画した。換気窓は縦すべり出し窓とし、1スパンに2か所ずつ開き勝手を交互に取りつけることで風の流れを良くして、川沿いの心地よい風を屋内に取り込める。

### 設計担当者

統括：児玉克史／建築：植田久、亀田恵美、小林航也／構造：福本義之、越智敏夫、塩津康弘

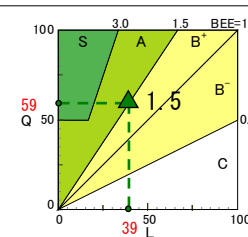
設備：榎本賢、小川智男、樫本弘和



自然の風が心地よく眺望のよいオフィス

ペリメーター部の天井の仕上材を外部の軒天と合わせることで、内外の境界を無くすよう計画した。このように、空間・機能両方の側面から外部環境を取り込む空間構成とすることで、企業の環境融和型ワークスペースを実現した。

建物データ	省エネルギー性能	CASBEE評価
所在地	BPI (モデル建物法) 0.79	Aランク
竣工年	BEI (モデル建物法) 0.78	BEE=1.5
敷地面積	LCCO <sub>2</sub> 削減 11%	2021年SDGs
延床面積		自己評価
構造		
階数		



主要な採用技術 (CASBEE準拠)
Q3 .2. まちなみ・景観への配慮 (建物配置や建物高さ、緑地によるまちなみへの調和)
Q3 .3. 地域性・アメニティへの配慮 (避難所として浸水対策やBCP対応、施設の開放)
LR1.2. 自然エネルギーの利用 (自然換気、自然採光)
LR1.3. 設備システムの高効率化 (LED照明、センサー制御)
LR2.1. 水資源保護 (節水型器具)
LR3.1. 地球温暖化への配慮 (LCCO <sub>2</sub> 削減)